

## 「RX Open Conference 2026 ～Review & Preview～」を開催しました

2026-4-20

令和4年より取り組みを開始したRX(琉大トランスフォーメーション)は令和7年度を一つの区切りとしており、これまでの取組を振り返りつつ、学外の意見を取り入れ今後に生かすため、「RX Open Conference 2026 ～Review & Preview～」を開催しました。教職員・学生に加え、DXを通じた業務変革や大学の業務変革に興味のある一般の方を対象に、事例共有と沖縄県内の有識者と本学経営層との懇談を通じ、RXの今後について考えました。

まず、岡崎RX推進室長より、RXの狙いとして、教育・学生支援・研究・医療・運営・働き方の改革により地域貢献の時間を創出すること、トップダウンではなく現場起点のボトムアップで進めてきたこと、地域課題に取り組む「RICCA DX」等も推進していることを説明しました。

続く事例発表では①学生証アプリの導入②データカタログ・琉大IRダッシュボード、③「がんみつ」の開発・展開、を取り上げました。

学生証アプリの導入について、学生証機能に加え、プッシュ配信(個別通知・安否確認)や学年暦・教務情報等へのポータル、図書館認証・証明書発行機利用などを実装し、カード発行・再発行業務の削減と情報伝達強化を図ったこと、学生の声を踏まえ機能拡充に取り組むことが紹介されました。

IRについて、学内データを整理したデータカタログとBIによる可視化ダッシュボードの試験的な作成・公開を契機に、職種横断の学び合いや経営層のデータ活用意識が高まり「教学マネジメント推進室」設置に至ったこと、エビデンスに基づく意思決定が学内に定着する教学マネジメント体制の構築を目標としていることが示されました。

「がんみつ」について、Excel標準機能を用いて開発したことや、がん関連情報を一元管理・可視化し、電子カルテを開かずに症例判定できることで年間作業日数を約20日削減したことが報告されました。この成果を地域医療機関に展開し、沖縄病院へ導入し、10施設が導入を希望していること、生成AIによる判定自動化研究を進め、さらなる地域展開を目指すことが示されました。

パネルディスカッションでは、福原修三様(DSSサステナブルソリューションズジャパン 合同会社顧問、琉球大学経営協議会委員)、譜久村親様(株式会社みらいおきなわ代表取締役常務)、学内から喜納学長と名嘉村理事(研究・地域連携担当)が登壇され、RXへの期待と今後の展望を語りました。

福原様は、日本のDXは企業価値向上に繋がる真の変革に至っておらず、特に中小企業でその傾向が顕著で、経営層理解や人手不足が要因と指摘。本学が「中小企業DXの知

の拠点」となり、経営者向けリカレント教育プログラムの創設や、経済団体と連携した DX の成功・失敗事例の収集と言語化・共有により地域経済へ貢献する役割への期待が示されました。

譜久村様は、おきなわフィナンシャルグループでの取り組みとして、DX による窓口事務削減などで創出した人材を法人営業担当や事業承継支援を語る新会社へ再配置し、業績向上を実現した事例を紹介。その成果を生かし、金融経済教育の実施や、離島への企業版ふるさと納税・人材派遣など、「地域社会の価値向上」に繋がる活動を積極的に行っていることが報告されました。大学にも「地域社会の価値向上」に貢献する役割が求められること、AI で社会が急変する中、卒業生・地域人材向けリカレント教育の重要性が指摘されました。

本学の人材育成の在り方、沖縄県内の経営層人材をどう変えていき、その人材を地域で生かすことを考えつつ、新しい大学像に向け RX を一つの切り口として進んでいくことを確認し、カンファレンスを閉じました。



喜納学長オープニングメッセージ(開会挨拶)



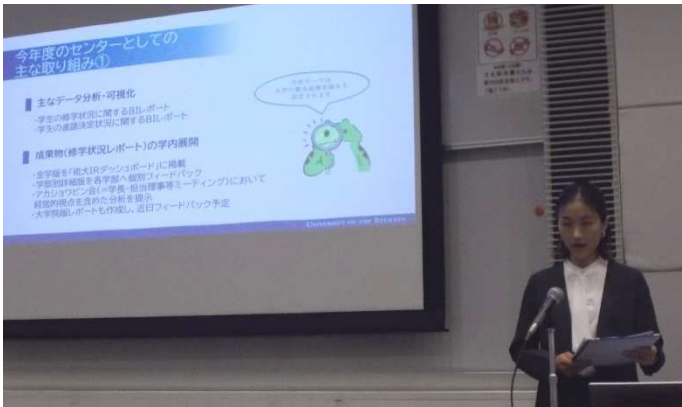
RX 概要説明



事例発表①



事例発表②



事例発表②



事例発表③



パネルディスカッション